ニャンポコ・クエスト

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ニャンポコ・クエスト

【Ｎコード】
Ｎ６２５４Ａ

【作者名】
雛祭パペ彦

【あらすじ】
よくある「クエスト」系のストーリーを、ちょっと変わった視点で描いた１話完結型のギャグ連載。宿屋に泊まったはずの勇者たちが不眠症になったり、歩いて冒険したくないので自動車を買いにいったりと、とにかくヘンテコな展開ばかり。

第1話　眠れない宿屋

勇者たちが冒険の旅に出てから、初めての夜。立ち寄った町の宿屋を訪れた。
「へい、らっしゃい。宿屋です」
小太りの親父が、威勢よく勇者たちを迎えてくれた。
「4人で1晩泊まりたいんですけど。部屋は空いてますか？」
「空いてる空いてる。うち暇だもん。つぶれそうなくらい暇だもん。4人で15Gね」
「へえ、安いですね。じゃあ、早速これ、宿代の15Gです」
そう言って勇者が宿代を手渡した瞬間、目の前が真っ暗になった。

テレレレー、テッテッテー

そして、どこからともなく妙なメロディーが流れてきたかと思うと、あっという間に夜が明けて、朝になっていた。
「昨夜は、よく眠れたかい？　まあ気をつけて行ってらっしゃい」
と、宿屋の親父は爽やかに言ってみせたが、勇者たちは、あっけにとられていた。
「ちょっと、おじさん。僕たち、まだ寝てないんですけど」
戸惑いながら、勇者が文句を言ってみせる。
「え？　寝てないって言われてもねえ…宿屋ってこんなもんだよ。それに、体力、魔法力ともに全回復してるでしょ」
「うーん…まあ確かに回復してるみたいですけど、眠ってないから、頭がボーッと」
「そんなことを言われても、あたしゃ知りません。とにかく体力や魔法力が回復しているのなら、宿代は返せないよ」
そういって、親父は表情をけわしくする。
「あのう、じゃあすみませんけど、もう1泊させて下さい」

まぶたを重くしながら、勇者が言った。
「え、朝になったばかりなのに、あんたたち、また泊まんの？」
「はあ。恥ずかしながら、お願いします」
勇者は少し腹を立てながら、我慢して言った。
「じゃあ、１５Ｇね」
「はい、これ１５Ｇ」

テレレレー、テッテッテー

「昨夜は、よく眠れたかい？　まあ気をつけて行ってらっしゃい」
３日後、勇者たちは全滅した。

第2話　歩くのはイヤだ

「え、１２００万Ｇですか？　僕たちには無理ですよー」
勇者が、慌てふためく。
「もちろん一括払いではありません。当社の自動車ローンを利用していただけば４００００回払い、すなわち毎月３００Ｇのラクラク返済が可能です」
そう言って、販売員は「ローン申込書」と印刷されている書類を差し出した。
「毎月３００Ｇ…スライムに換算して１００匹分ってところね。楽勝よ」
魔法使いの少女が、瞬時に計算してみせる。
「今なら、特別ミラクル得々キャンペーンにつき、たったの年利１％で利用できますので、とってもお得ですよ」
そんな販売員の言葉に、勇者たちもまんざらでない様子だった。
「確かに、ラスボスがいるところまで、わざわざ歩いて行くっていうのも疲れるよなあ」
戦士が、遠慮がちに言った。どうやら、なんとなく日頃から不満に思っていたような口ぶりだった。
「おっしゃる通り。車社会だというのに歩いて冒険なんて、もう時代遅れでしょう」
しめたとばかりに、販売員のセールストークが勢いを増す。
「それに、この装甲式キャンピングカーなら、大抵のモンスターを一瞬にして倒すことができ、いちいち車を降りて戦闘する必要がありません」
「おお、なるほど」
あまり殺生を好まない僧侶が、興味を持ち始める。悪のモンスターといえども、神に使える身として直接手を下すのは忍びないと思っていたのだろう。確かに、車で轢き殺すのであれば、自分が殺さ

ない分、罪悪感も少なくて済む。
「しかも、キャンピングカーですので、１００Ｖ電源および冷暖房付きなのはもちろんのこと、キッチン、トイレ、シャワー付きの浴室、それにサウナ完備というふうに、冒険を生業としているお客さま方にとっては、うってつけの商品でございます」
「うーん。ちょっと高いけど、ひと月の返済額が３００Ｇでいいのなら…みんな、どうする？」
かなり乗り気な様子で、勇者が他の３人に意見を求めた。
「おれは賛成」
「わたくしも」
「いいと思うよ。あたし、サウナ三昧の日々に憧れてたの」
こうして、勇者を含めた４人は、それこそウキウキと目を輝かせながら、販売員が差し出した「ローン申込書」に、それぞれの印鑑を押したのだった。
このローン契約が、ラスボスを倒したあとも自分たちを苦しめることになろうとは……勇者たちは知るよしもない。

第3話　クリーンな冒険

その巨大なモンスターは、突然襲いかかってきた。
まさか、一般の住宅街を歩いている途中で、全長１８メートルもの巨大モンスターに出会うなどとは思いもせず、勇者たちは戸惑いながらも、必死で戦った。
ところで、いくら魔王やその手下たちを退治するためとはいえ、何をしてもいいわけではない。勇者といえども、他人に迷惑をかけて許されるわけではなかった。
たとえば、戦闘中に、一般人および一般人が所有する建物や財産に被害を与えた場合は、弁償しなければならない。
さいわい、魔王退治を命じた国王が、勇者たちに「ＲＰＧ損害保険」というものを掛けてくれているので、金銭的な負担はなかった。
しかし、損害保険だけではカバーできないこともある。
「ちょっと、あんたたち！　人の家の前をこんなに汚したんだから、ちゃんと片付けていきなさいよ！」
サンダル履きのおばさんが、ヒステリックな金切り声で、勇者たちを叱りつける。
「あ、はい、もちろんです。ぼ、僕たちが責任を持ってキレイに掃除していきますので。ど、どうも、ご迷惑をおかけしておりますです」
つい先程、戦闘を終えたばかりの勇者が、愛想笑いを浮かべながら答える。他の三人も、だいぶ疲れていた。しかし、自分たちがブチ殺したモンスターの死骸や血ヘドを片付けるのは、冒険をする者の義務なのだ。
「じゃあ、始めようか」
フラフラになりながらも、勇者たちは、この前買ったばかりのキャンピングカーのトランクから、バケツ、雑巾、洗剤、デッキブラシ、ホースを取り出す。

「ええと、あのう、も、申し訳ないんですが、お宅の水道をお借りしたいのですけれど…」
険しい表情を浮かべているオバサンに、勇者が恐る恐るたずねた。
「水？　別にいいけど、１０秒につき１０Ｇね」
「あ、はい。も、もちろん使った分の水道代はお支払いいたします
です」
平身低頭、これ以上ないというくらいの態度で礼を述べると、ホースを片手に持った勇者は、水道の蛇口に向かって歩いていく。
「ストップウォッチで計ってるから、水道代をごまかそうとしても無駄よ」
そう吐き捨てるように言って、オバサンは家の中へ戻っていった。
「あーあ。あたしたち、いつになったら魔王退治を果たせるんだろう……」
しみじみと魔法使いの少女がつぶやくと、他の三人も、疲れきった表情で溜め息をついた。

第４話　イベント拒否

「船に乗せてください」
勇者が言った。
「すまねえが、今は無理だ」
カマンベール号の船長は、浮かない顔で答える。
「なぜ、無理なんですか？　お腹が痛いんですか？」
船がないと、勇者たちは、海の向こうにある大陸に行くことができないのだ。
「…実はな、３日前におれの娘が誘拐されたんだ。だから、もう心配で心配で、とても船なんか」
「では、身代金の要求が？」
興奮気味の戦士が、たずねる。
「ああ。だが、１００億Ｇなんて、とてもじゃないが払えねぇ。もう、おしまいだ」
そう嘆いて、船長は頭を抱える。
「どうやら出番のようですね」
僧侶が、杖を威勢よく振り回して言った。
「おお！　あんたたちが、娘を助けてくれるのか？」
「ええ、まかせてください。その代わり、無事に救出できたあかつきには…」
「も、もちろん、船に乗せてやる…いや、喜んで乗せさせすせさせていただきます！」
「交渉成立ですね。じゃあ、さっそく身代金の受け渡し場所を教えてください。代わりに僕たちが行って、犯人をブン殴ってきますので」
みんな、ヤル気満々である。
「よし、わかった。身代金の受け渡し場所は、あそこだ」
そう言って船長が指差した先には、大きな建物があった。海沿い

に建っている。
「たくさん煙突がありますけど、何かの工場ですか？」
「違うよ。あれは原子力発電所だよ」
船長が、希望に満ちた明るい表情で答えた。
「勘弁してください」
勇者たちの表情が、瞬時に青ざめる。
「なんで原発なんですか？」
ガクガク震えながら、魔法使いの少女が聞いた。
「おれに言われてもなあー」
船長は、とぼけてみせる。
「あのう、放射能は大丈夫なんでしょうか？」
「心配なら、道具屋で毒消し草を買っていくといい」
真顔で、船長がアドバイスをする。
「毒消し草で、放射能が消えるんですか？」
「たぶん、消えないだろうなあ」
船長が、しみじみと言ってみせた。
「えぇぇ！？」
その日、勇者たちは道具屋へ行って「海パン」と「ビキニ」を購入した。

第5話　ウソだぴょん

「もうレベル8だぞ」
勇者は、あきれていた。
実は、魔法使いの少女が、いまだに呪文を覚えないのである。
「ごめんなさい」
口ではそういいながらも、少女は、まったく反省していない。
「あのさあ、魔法が使えない魔法使いなんて、はっきり言ってジャマなんだよねー。だってさぁ、攻撃力なんて皆無に等しいじゃん？で、強力な武器を持たせようとしたら、重いので装備できない？赤ちゃんかよ」
戦士が、少女を責める。
「もしかして経歴詐称？　ちょっと免許証を見せてごらんなさい」
僧侶あらため神官が言った。あ、読者のみなさん、僧侶から神官に呼称変更しますね。日本で僧侶っていったら、仏教の坊さんですもんね。すいませんね。
「そうだ、免許証だ！　おい魔法使い、ちょっと免許証みせろ」
戦士が乱暴にそう言うと、ウソ泣きに失敗していた少女は、しぶしぶ、おしゃれポーチから免許証を取り出す。
この免許証は、勇者、戦士、神官、魔法使いなどを名乗るために必要な証明書であり、専門の教習所を卒業することにより取得できた。
ちなみに、免許証を持たない者がモンスターを殺すと、動物虐待罪で逮捕される。
「うーむ……あ！　やっぱり！」
免許証をチェックしていた勇者が、大声で騒ぎだす。
「ほら、ここ。この職業欄のところ、これシールだ。上からシールが貼ってある！」
「あー、うー、にゃー」

少女は、あきらめ顔だった。
「かじ…てつだい？　てめぇ、本当の職業は、家事手伝いかよ！」
「名門ソルボンヌ家事専門学校・卒業だよ。すごいでしょー、えへへ」
やけっぱちである。
「帰れ」
「帰りなさい」
「ていうか、死ね！」
もはや用無しと思ったのか、勇者たちは、少女に口汚い言葉を浴びせる。
「みんな、ひどい！　えーん」
「くたばれ」
お見通しだった。
「えーんえん…あ、わかった。わたし、お嫁さんになる。この冒険が無事に終わったら、３人のうちの誰かのお嫁さんになってあげる！」
そう言って、少女はワンピースのボタンを１つはずして見せる。
チラリと、バスト９０センチの谷間がのぞいた。
「ん、ふわぁー」
「よ、よく寝たなあ」
「ゆ、夢だ。ぜんぶ夢だ」
あわてて顔を赤らめながら、勇者たちは、わざとらしい寝起きの演技をしはじめた。
こうして、少女の経歴詐称は、忘却の彼方に押しやられたのである。

第6話　勇者たちの反乱（前書き）

国王さまはヒステリー。それに耐えかねた勇者たちは、反乱を決意する！？

第6話　勇者たちの反乱

「しんでしまうとは、なさけない」
勇者が目覚めると、そこには国王がいた。
「あ、国王さま。おひさしぶりです」
勇者は、懐かしさのあまり、目を潤ませる。
冒険の旅にでて、はや3ヶ月。
はじめての全滅だった。
「てめえ、お久しぶりですじゃねえよ！　なに全滅してんだよ」
国王はすごい剣幕で、勇者を罵倒する。
「は、はい。あのう…そのう」
こんなに怒られるとは思わなかったので、勇者は驚いていた。
後ろを振り返ると、棺桶が3つ並んでいた。
「貴様らが全滅するたびに、いくらカネがかかると思っておるのだ。おい答えてみろ！」
「ええと。たぶん、いっぱい…」
「ふざけるな！」
怒り狂った国王は、勇者に向かってガラス製の灰皿を投げた。
「ぷばぶぴっ」
勇者に47のダメージ。
「ひ、ひぃー。たすけてー」
流血しながら、勇者が叫ぶ。
「土下座して反省しろ！」
続けて、国王は、勇者にカカト落としをくらわせる。
「どぷぺぴょ！」
勇者に62のダメージ。
「やめろ！」
その声は、棺桶の中から聞こえてきた。
「黙って聞いてりゃあ、調子に乗りやがって」

棺桶のフタがズリ落ちて、戦士が起き上がった。
「おい、オッサン」
「お、お、オッサンだと。わ、我輩に向かって、オッサンとは何事だ！」
思わぬ暴言に、国王が取り乱す。
「豚め！　国王の姿を装った、このオス豚め！」
別の棺桶からは、神官が出てきた。
「ちょっと、あんた！　あたし達が本気だしたら、こんな城、半日で壊滅できるんだからね」
家事手伝いの少女が、ハッタリをかます。いちおう「魔法使い」という事になっているので、効果は絶大である。
「なあ、オッサン。ひと暴れしてやろうか？」
戦士が、腰に帯びた「剣」を鞘から抜いてみせる。
「そういえば、この城には秘蔵の武器庫があるはずです」
知恵者の神官が、略奪をほのめかす。
「王女さまのクローゼットって、たしか４階にありましたよね？」
家事手伝いの少女が、きらびやかな衣装に胸をときめかせる。
「あ、わ、悪かった。わしが悪かった。すまん。すまんかったね」
勇者たちの常人離れした武力を恐れた国王が、態度を軟化させた。
「もうしわけございません、だろ？」
その後、３時間にわたり、勇者たちの「国王イジメ」は続いた。

第7話　薬草カレーライス

魔法使いの経歴を詐称していた少女。
今の仕事は、もっぱら勇者たちの食事づくりだった。
「なに作ろうかなー」
冷蔵庫を開けると、ギッシリと薬草が詰まっていた。
「病院くさーい」
ほとんどの薬草は、倒したモンスターが持っていたもので、道具屋で買ったものは少ない。捨てずに取っておいたら、溜まってしまったのである。
「買い物に行くの、めんどくさーい」
重度の役立たずである。
そういうわけで、他の食材を切らしていたこともあり、今日の夕飯は、薬草づくしということになった。
「えーと…あ！」
冷蔵庫の中から薬草を取り出していると、少女は大変なことに気がついた。
およそ3割の薬草に、カビが生えていたのである。
「…まあ、でも、熱を通せば食べれるよね。捨てるのもったいないもん。　ちょうど肉もないことだし、薬草カレーに決定！」
真の敵とは、味方の中に潜んでいる。
少女が、自分の気持ちをいっぱい誤魔化しながら料理をしていると、勇者たちが帰ってきた。
いまは、3人だけで戦っているのだ。
「おかえりー」
少女が、作り笑いで迎える。
「あ、いい匂い」
「夕飯はカレーだな」
「楽しみですね」

大量のスパイスによって隠蔽された「薬草臭」にも気づかず、勇者たちは顔をほころばせていた。
「福神漬も手作りだよ」
しかし、原材料の９９％が薬草である。それを着色料と化学調味料で誤魔化してあった。
「おーーーー！」
少女の意外な特技に、何も知らない勇者と戦士と神官が、感嘆の声をあげる。
「いっぱい作ったから、好きなだけおかわりしてね！」
少女の表情からは、すこしも罪悪感は見られない。
「いただきまーす」
勇者たち３人の皿のなかには、米飯と、カレールゥと、ジャガイモのようなものと、ニンジンのようなものと、肉のようなものが盛りつけられていた。
ちなみに「肉のようなもの」とは、すりつぶした薬草に化学調味料をブチこんで、片栗粉でこねて油で揚げたもので、決して肉ではない。
「うまい！」
勇者が、喜びの声をあげる。
「スパイスっぽくて、本格的だよな」
戦士が、素直に少女をほめる。
「この肉、けっこう高いんじゃないですか？」
神官が、嬉しそうに言った。
「よかったー。気に入ってもらえて（カビ薬草カレーを）」
ふりかけご飯を食べながら、少女が言った。

第8話　勇者は高卒

「魔王を倒したあと、何をして遊ぼうかなー」
勇者がつぶやく。
「そんな先のこと言われてもなあ」
隣の布団で寝ている戦士が答えた。
「とりあえず、お金はいっぱい貯まってるよね！」
勇者が皮算用をして、胸をワクワクさせる。
「あのう…冒険中に稼いだお金は、すべて国庫に帰属されるんですけど」
神官が、布団から起き上がって言った。
「えーっ！」
「だって、ほとんどのお金は、モンスターを倒した時に手に入れたわけで、そのお金というのは、モンスターが罪もない人々から強奪したものなわけで」
「うん」
「つまり、あれは他人様のお金なわけです。魔王を倒すまでは大目に見てもらえますが、クリア後もそれをネコババし続けるのは世論が許さないでしょう」
理路整然と、神官が説明する。
「じゃあ、宝箱のお金は？」
納得いかない表情で、勇者が食い下がる。
「もちろん、国庫に帰属です。本来、交番に届けるべきところを、冒険の費用に流用していたわけですから」
「それに、クリア後の報酬なんて、あまり期待できないしな」
戦士が、ドライな見解を付け加える。
「じゃあ、どうやって生きていけばいいんだよう」
勇者が、将来の不安に襲われはじめた。
「私の場合、実家の教会を継ぎますけど」

涼しい顔で、神官が言ってみせる。
「いいなー。既得権益いいなー」
勇者が、ねたみ全開の態度で言った。
「オレの場合、冒険で鍛え上げた肉体を生かして、土木作業員にでもなろうかな」
戦士は、自分の適性をわきまえている。
「ぼ、僕は肉体労働なんかしたくないよう。だって勇者だし、勇者はラクして稼げるはずだと思うし、だって勇者だもん。高卒だけど、勇者だもん！」
幼い頃から甘やかされてきた勇者には、まだまだ世間というものがわかっていない。
「肉体労働がイヤなら、通信教育で資格でも取得すればどうですか？」
よせばいいのに、神官が中途半端なアドバイスをする。
「あ、それだ！　通信教育なら冒険しながらでも勉強できるし、いいアイディアだね！」
「例えば、ホームヘルパ「弁護士がいいなー。僕、弁護士になろうかなー」
神官の現実的なアドバイスを遮り、勇者は途方も無いことを言った。
「さっそく明日、資料請求しなきゃ！」
絶望が希望に変わると、ほっとしたのか、勇者は3秒で眠りについた。

第９話　地下１２６階にて

「この地下１２６階に、魔王を倒すための強力なアイテムがあるはずだけど…」
勇者が、攻略本を見ながら、ダンジョンの中を見渡す。

「おい、おまえら！」

突然、暗闇の向こうから、ぶっきら棒な声が響いた。
「だ、誰？」
勇者が、へっぴり腰で返事をする。
「よく来たな。オレは、伝説の道具屋だ」
闇の奥から現れたのは、小太りのオッサンだった。
「伝説の道具屋？」
「そうだ。オレは、魔王決戦用アイテムを専門に扱う道具屋だ。偉いんだぞ！」
なぜなのか、ものすごく威張っている。
「私たちは、魔王を倒すための旅をしている者です。ぜひ、そのアイテムを譲っていただけないでしょうか？」
神官が、丁寧な言葉でお願いする。
「５０万Ｇ、払え」
「えっ、お金を払うんですか？」
普通、そういう重要なアイテムというのは、タダのはずである。
「当たり前じゃん」
オッサンが、涼しい顔をして答える。
「…わかりました。払います」
さいわい勇者たちには、多少の蓄えがあった。魔王を倒すためならば、仕方がない。
「よし。じゃあ早速、おまえらに伝説のアイテムを売ってやろう」

５０万Ｇを受け取ると、道具屋のオッサンは、奥から宝箱を運んできた。
「まず１つめ。プリペイド式の携帯電話だ」
「え？」
意表をつかれた戦士が、思わず声をあげる。
「この携帯電話は、絶対に逆探知されない。そして、通話時間は無制限だ」
「はあ」
勇者が、気のない返事をする
「２つめは、伝説の石板だ」
やっと、それらしいものが出てきたので、勇者たちの期待は高まる。
「この石板に刻まれている数字は……魔王の自宅の電話番号だ」
意味がわからない。
「そして３つめ。『世界のお経・２４枚組・ＣＤ－ＢＯＸセット』だ」
あきれた勇者たちは、地面に座りこみはじめた。家事手伝いの少女などは、ｉＰｏｄを聴いている。
「それって、もしかして…」
「そうだ。この３つを使って、３６５日２４時間ぶっ続けで、魔王の家にイタズラ電話をするのだ。これで確実に、魔王の力は半減する」
「本当に？」
「間違いなく、魔王はノイローゼになり、不眠症に陥る」
道具屋のオッサンは、自信に満ちあふれていた。
「元・ストーカーのオレが言うんだから間違いない。ひたすら『お経』を流しつづけるイタズラ電話が、いちばん効く。うまくいけば、自殺したりする」

第１０話　不祥事ガール

勇者たちは、モンスターを倒した。
「たらりらったったー♪」
どこからともなく、楽しげなメロディが聴こえてきた。
「はいはい、どうもどうも、おつかれさまでございまーす。ただいまの戦闘をもちまして、経験値が５６８９４ポイントに達しましたので、勇者さんはレベル１３になりました。おめでとうございまーす」
勇者たち４人の前に現れたのは、ネクタイをしめた、スーツ姿の男だった。
「それに伴いまして、体力が５ポイント、魔力が４ポイント、ちからが２ポイント、かしこさが１ポイント、寝相の良さが２ポイント、人づきあいの良さが１ポイント、それぞれアップしました！」
スーツ男は、持っているモバイル機器を操作しながら、早口で言った。
「いつもご苦労さま」
神官が、ねぎらいの言葉をかける。
「仕事ですから」
スーツ男は、淡々と返事をした。
「あたし、それ欲しい！」
突然、家事手伝いの少女が、スーツ男の持っている機器を指差して言った。
「ははは。ご冗談を」
「冗談じゃないよ。だから、ちょーだい」
少女は、しつこく食い下がる。
「だめです。これは会社の備品ですから」
「じゃあ、いくらなら売ってくれるの？」
「上司に叱られます」

「いいじゃん。昼寝してたら盗まれちゃったって報告すればいいじゃん」
「もっと叱られます」
いいかげん止めに入ればいいものを、勇者や戦士や神官たちには、どうすることもできなかった。というか、少女のワガママに、なるべく関わりたくないと思っている様子だった。
「てめえ、よこせよ！」
どこで覚えたのか、きわめてドスのきいた声で、少女がスーツ男を脅迫しはじめる。
「あ！　どろぼー」
しまいには、スーツ男が持っている経験値測定器を、ムリヤリ奪い取ろうとしだした。
「ひとぎきの悪いこと言うんじゃねーよ。てめー、ころすぞ」
その口汚い言葉を皮切りにして、少女とスーツ男の格闘が始まった。
「てめえ、そのエロい手をどけろよ！　おれに触んなよ！」
これ、少女のセリフである。
「ちょ、ちょっとやめて下さい！　だめです！　ちょ、暴力はやめて下さい！　ちょ、あっ！」
襲いかかってきた少女から機器を守ろうとするあまり、スーツ男はその場に転倒してしまった。
「ガッ！……」
勢いよく後頭部を地面にぶつけたスーツ男は、そのまま動かなくなった。

最終話　魔王カルピス

玄関ドアの表札には「魔王」の２文字。
「……長い冒険だった」
某アパートの２階・角部屋。
ここ２０７号室こそが「魔王」の自宅なのである。
「ついに、最終決戦だ！」
戦士が、２０７号室のインターホンのボタンを押す。
「……はーい」
すぐに、ドアの向こうから返事があった。
「た、宅急便でーす！」
魔王を油断させるために、戦士はウソの呼びかけをする。
「はーい、いま開けまーす」
部屋の中から聞こえてくる声は、なぜか女性のものだった。
「ここって、本当に魔王のアパート？」
不安になった神官が、つぶやいた。

ガチャッ

解錠する音がして、とうとう２０７号室のドアが開く。
「魔王、覚悟し…あーっ！」
「あーっ！」
部屋から出てきたのは、ごく普通のオバサンだった。
「え？　誰？」
アロハシャツ&短パン姿で登場したオバサンは、とても魔王には見えない。
「あのう…ここって魔王のお宅では？」
勇者が、おそるおそる尋ねた。
「そうだけど……アナタ達は？」

「あ、僕らは、そのう、勇者とか戦士ですけど」
魔王相手だというのに、なぜか敬語を使って勇者は答える。
「……勇者？」
「はい、勇者です」
「で、アタシに、いったい何の用が？」
オバサンが怪訝な顔をしてみせる。
「とぼけるな！　この極悪人め！」
戦士が、剣を抜いて構えた。
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「だまれ！」
「アナタ達、誤解してるわよ！　確かに、アタシは魔王（４３）だけど、×××ファンタジーっていうＲＰＧのラスボスよ！」
「えっ！？」
「やっぱり誤解してる…アナタ達は、なんていうＲＰＧの人？」
「ええと、そのう、×××クエストですけど」
勇者たち４人のあいだに、気まずい空気が流れはじめる。
「ほら、やっぱり。別のＲＰＧでしょ？」
「……あ、それは、そのう」
もう謝るしかなかった。いちばん暴言を吐いていた戦士などは、土下座したうえで、オデコを地面にすりつけて、必死で謝った。
「……土下座までされたら、仕方ないわねー」
あきれながらも、魔王（４３）は、ようやく怒りを鎮めてみせる。
「まあ、これも何かの縁かもしれないから……カルピスでも飲んでいきなさいよ。クーラーもきいてて涼しいわよ」
こうして勇者たちは、カルピスだけでなく「水ようかん」や「くだものゼリー」などを、ご馳走になりましたとさ。

最終話　魔王カルピス（後書き）

連載終了です。
読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6254a/

ニャンポコ・クエスト

2011年7月23日03時31分発行